

栃木の子どもの学力向上を図る授業改善プラン

小学校・国語科 vol.3

平成18年1月 栃木県総合教育センター

平成16年度教育課程実施状況調査(小学校5学年の内容)のペーパーテスト調査結果から、今回は、「書く活動」について、指導のポイントを示します。

ペーパーテスト調査結果からみえた成果()と課題()

記述式の設問6問の平均通過率は62.1%であり、全国の平均通過率(61.3%)をやや上回っています。

記述式でも通過率が7割を超えた設問が2問(下表・)ありました。設問の状況設定がよく理解できれば、的確に記述できることが推察されます。

ただし、6問中、2問(下表・)が、全国の通過率をやや下回っています。下表は、図を含む観察記録をもとにして、観察文を詳しく書くこと、下表は、その場で聞いた放送内容から自分の考えを書く設問です。どちらも、日頃のテストとは異なった形式で出題されている設問です。

自分の体験や経験をあげて考えを書く設問(下表・)では、設定通過率(想定した正答率)を10%以上、下回っており、自分の意見を明確に記述する問題に課題が残ります。

今回の調査問題は、いずれも100字程度で記述する形式で出題されています。以下の表は、記述式として出題された設問の内容と出題領域、通過率について示したものです。本県の通過率の高い順に並べ替え、 から の番号を付けてあります。

記述式の設問の概要	出題領域	本県の通過率	全国の通過率	設定通過率
5年生の図書委員として、2年生に「読み聞かせ会」へのおさそいの文章を100字程度で書く。	書くこと	79.7%	78.3%	75%
文学的文章を読み、登場人物の気持ちについて、自分の感想を100字程度で書く。	読むこと	71.9%	69.9%	60%
観察記録(図を含む)をもとにして、たまごから生まれた幼虫が成長する様子を詳しく100字程度で書く。	書くこと	66.1%	66.3%	55%
「まき子さんのメモ」をもとにして、方言発表会の「開会のことば」をみんなに話すように100字程度で書く。	話すこと ・聞くこと	56.2%	53.8%	55%
読書のよさについて書いた文章を読み、自分の読書の体験もあげながら、自分の考えを100字程度で書く。	読むこと	54.6%	52.4%	70%
放送により、ある学級の話し合いを聞き、自分の経験したことから理由をあげて、自分の考えを100字程度で書く。	話すこと ・聞くこと	43.9%	47.0%	55%

記述式の設問6問の出題領域は、「書くこと」だけではなく、問題設定状況により「話すこと・聞くこと」や「読むこと」も対象になっています。では、実際にはどのような問題設定として出題されたのでしょうか。例えば、設問 は、次ページのような形式で出題されています。

本県の通過率	56.2%	全国の通過率	53.8%	設定通過率	55%
--------	-------	--------	-------	-------	-----

【出題のねらい】
考えたことや自分の意図が分かるように話の組み立てを工夫しながら、目的や場に応じた適切な言葉遣いで話すこと

(原稿用紙略)

もし、あなたが「開会のことば」をまき子さんのメモにしたがって話すとしたら、どのように話しますか。次の原稿用紙にみんなに話すように百字ぐらいで書きましよう。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線(＝)で消したり、行間に書き加えたりしてもかまいません。

発表会の始まりを言う
発表会の目的について話す(たくさんの方言について知る)
発表したり聞いたりする時の心がまえを伝える

五 まき子さんは、学級代表で方言発表会の「開会のことば」を話すことになりました。そこで、話す前に、次のようなメモを書きました。

(前半省略)

紙面の関係で、問題文を部分的に省略してあります。

この設問のように発表の原稿を書くという設定で、話したり聞いたりすることと関連させて書く言語活動を授業場面で経験している児童は少ないと考えられます。また、このような記述式のテスト問題に慣れていないために実力が発揮できなかったこともあるでしょう。そこで、できるだけ具体的な場面に即した目的や相手を設定したうえで、適切な表現様式に応じて発表原稿や文章を書いたりする活動を授業の中に取り入れていくことが必要です。

また、設問、などのように、「自分の意見を明確に記述する」問題の正答率が低い理由としても、国語科の普段の授業場面で、文章を正確に読み自分の考えを付け加えながらまとめていく学習活動があまり取り入れられていないことが考えられます。そこで、意見や考えを深めるために、自分の生活経験や知識と結び付けたり、他の人の立場や考えとの違いを意識したりして、自分の考えをまとめる「書く活動」を日常的に取り入れる必要があります。

以上のことを踏まえて、次に国語科の授業の改善について述べます。

授業の中で、自分の考えを「書く活動」をしっかりと位置付けましょう

1 自分の考えを書く活動を、もっと多く取り入れましょう

物語文を最初に読んだ後には、「初発の感想」としてひとまとまりの文章を書かせることが一般的ですが、単元途中の話し合いの場面では、ともすると話し合っただけでそのまま次の活動に移ってしまうことが多いのではないかと思います。あるいは、先を急ぐあまり穴埋め式のワークシートにキーワードだけを書き入れさせる活動が多くなっているのかもしれない。

国語科の授業の中でじっくり考えさせるためには、自分なりのことばでひとまとまりの文章を書い

てみるのが最も効果的であると考えられます。もっと数多く、自分の感じたことや考えたことを「書く活動」として位置付けたいものです。

そこで、1単位時間の中に、「書く活動」を位置付けるに当たっての留意点を示します。

1 どの場面で書かせるのか〔場面〕

授業展開の中で、例えば、話し合いの前に書く活動を入れるか、あるいは話し合いの後に入れるかでは授業展開が大きく変わってきます。本時にじっくり考えさせたいことと書く活動を関連させることが大切です。

2 どんな内容をどの程度まで書かせるのか〔内容〕

授業者は、授業のねらいや評価規準に照らして「ここまでは書かせたい」という意識をもちましょう。例えば、必ずこのキーワードを使って書くなどの条件付けも大切です。

3 どのくらいの時間で書かせるのか〔書く時間と分量〕

最初は、少ない量で短い時間を設定します。書き慣れてくるに応じて、字数も時間も増やしていきます。

4 書かせたものはどうするのか〔書く目的・評価〕

児童が書いたものを何人かに発表させるのか、隣の児童と読み合うのか、提出させて授業者がコメントを入れるのか、書かせたものの生かし方をあらかじめ考えておく必要があります。

2 理由や自分の考えを書けるように段階的な指導を心がけましょう

「根拠や理由をあげて100字程度で書きなさい。」と、いきなり指示するだけでは学習効果につながりません。授業の中に「書く活動」をしっかりと位置付ける努力をしながら、さらに「書くこと」への意欲を高めていくためには、理由や自分の考えを書けるような段階的な指導を心がけていく必要があります。

書く内容についての条件付け

2ページであげた設問では、発表メモをもとに発表原稿を書くという条件付けがなされています。難しいように感じますが、発表メモは実は段落構成を示しているわけで、このことが分かる児童には反対に書きやすくなっているのです。

したがって、授業中であれば、書くことの手がかりやヒントを提示することにより、書く活動を充実させることも可能です。

右に授業でも使えるような教師の問いかけ例を示します。授業の流れに合わせてご活用ください。

書く量（文章の長さ・字数）

最初は、「感じたことをなんでもノートに一行程度で書いてみましょう。」など、少ない量でよいのです。書かせる内容にもよりますが、次第に字数を増やして「今日は、50字ぐらいで詳しく書くことに挑戦してみましょう。」など、意欲付けをしていく「ことばかけ」が重要です。

書く内容のヒントとなる教師の問いかけ

- ・（キーワードを提示して）「この二つのことばを使って、自分の考えをノートにまとめてごらんください。」
- ・「自分の似た経験と比べて、主人公の行動と気持ちを考えて書きましょう。」
- ・「文章中の気になるところにサイドラインを引いて、なぜ気になったのか理由を書いてみましょう。」
- ・「先生の意見の例に対して、根拠を三つ探してあなたの意見を書いてみましょう。」

全般的にいえることですが、「書くこと」には、児童の個人差が大きいのは事実です。したがって、「書くこと」の指導には、授業者の個別のかかわりが大切になってきます。書く時間を設定したら、机間指導をする時間を必ずとりましょう。書けない児童に話しかけて、もう一度書く直前にみんなで話し合ったことを思い出させたり、「書けなくなったら、隣の友だちと話し合ってごらん。」と声をかけたりするだけで、自分の書くことのイメージがみえてくる場合があります。「書くこと」の力の向上には、このような教師の個別の児童へのかかわりが大変有効です。

3 児童の思考の足跡がみえるように「学習ノート」の指導を大切にしましょう

「読むこと」の指導などでは、ワークシートを使うこともよくありますが、問いかけがあらかじめ決められたワークシートでは、児童の思考が深まらない場合もあります。そこで、学習ノートを上手に活用してはどうでしょうか。まずは、自分のクラスの児童のノートを提出させ、右のような視点で、一人一人の学習ノートを点検してみてください。おそらく、ノートの書き方から児童がどんな気持ちでどのように考えていったのかが伝わってきます。そこから、「書くこと」の指導の改善策も見えてくることでしょう。また、授業者が自分の授業を振り返って、「書く活動」の位置付けや指導方法について改善を図るための最もよい手がかりになるはずです。このチェックリストは、少し内容を変えれば、最終的には児童自身が使用することも可能です。

教師のための「学習ノート」チェックリスト
～「書くこと」の指導改善のために～

日付・学習課題が決まった場所に書かれていますか。

後で読み返せるような丁寧な文字で書かれていますか。

時折、授業者のコメントが入っていますか。

板書を写すことだけのノートではなく、自分なりの考えが書かれていますか。

表や図や矢印を使って工夫して自分の考えを表そうとされていますか。

話し合ったことや友だちの意見について、自分の考えが書かれていますか。

授業についての感想や振り返りがきちんと書かれていますか。

自分の考えが伝わった喜びが味わえる「書く活動」を工夫しましょう

「自分の考えを書きなさい。」と授業中に言われても、書くことに抵抗感をもっている児童や自分の書くことに自信のない児童は、なかなか筆が進まないものです。ここでは、自分の考えを意欲的に書くことができるようになるための指導の工夫について述べます。

1 お互いの感じたことや意見を尊重する雰囲気づくりに努めましょう

書くことへの抵抗感を軽減し自信をもたせるためには、それぞれのものの見方・考え方を尊重し話し合える雰囲気を教室の中につくっていくことが大切です。3分間スピーチや教材文の感想を交流させた後、自分が感じたことを「書く」時間を設定する場合でも、お互いの感じたことや意見を尊重する態度をとれるようにしたり、自分の言葉で書き表そうと努力していることを認め励ますことで、自分の考えを書くことが少しずつできるようになります。まず、児童の発言や書いたことを大切に扱っていく態度を教師が見せることから始まります。

2 友だちと協力して楽しく書くことで、「書く活動」に慣れさせましょう

学習指導要領5・6学年では、「相手の意見を取り入れて書くこと」や「読み手の立場に立って効果的に書くこと」が求められています。しかし、書くことが精一杯という児童にとって、教師が「相手の意見を取り入れて書きましょう。」と指示してもなかなか作業を進めることができません。

また、「書く活動」は、基本的には個人的な行為です。話し合いをもとにして書く活動でも、普通は「書くこと」は一人で進めていくことになります。

そこで、次の2点を大切にして「書く活動」を工夫してみましょう。

友だちと共同で書く作業を教師が意図的に取り入れる。

相手の意見を取り入れて書く場面を設定する。

ここでは、例1・2・3のような三つの活動例を示します。楽しく書き進むことができ、書くことを習慣化する手がかかりとして大変有効な活動例です。

例1 鉛筆対談

- 1 2人組になり好きなテーマを決める。
- 2 これからはおしゃべりはしないことを約束する。
- 3 2人で向かい合う形で、1枚の紙に交互に考えたことを書いていく。(会話なので、短い文でよいことにする。)
- 4 終わったら、他の2人組と作品を交換して読み合う。

例2 リレー作文・続き話

- 物語の書き出し50字の文章を読み、物語の続きの話を自由に考えて、ストーリーを発展させていく。
- 1 最初にAさんが、50字程度で書いたら、次は、Bさんがその続きを書いていく。
 - 2 4人程度でグループを作り、次々と紙を回して書いていく。
 - 3 グループ全員が書き終わったら、できた話を読み合う。

例1は、低学年向けの活動ですが、テーマによって高学年でも十分楽しく書く活動ができます。最初は、児童にとって日常的なテーマがよいでしょう。

例2は、起承転結のある一貫したストーリーをもつ作品を4人で作ることができると、とても楽しい活動になります。また、作品を音読させると、児童によって個性がはっきり表れ、感じたことを自由に話したり書いたりすることができる雰囲気が学級に生まれます。

例3 紙上対談・リレー対談

- 1 「小学生が書くには、シャープペンシルがよいか鉛筆がよいか」等のディベートの命題をいくつか設定させる。
- 2 最初の人賛成か反対か立場をはっきりさせて意見を書く。
- 3 次の人は最初の意見を読み、相手の主張していることを受けて賛成か反対かどちらかの立場で、意見を書く。
- 4 3人目の人は、前の二人の意見を読んでさらに意見を書く。
- 5 最初の意見を書いた人は、全部の意見を読み直しまとめの作文を書く。

四 番 目 の 意 見	三 番 目 の 意 見	二 番 目 の 意 見	最 初 の 意 見
----------------------------	----------------------------	----------------------------	-----------------------

貼り付けて伸ばしていく。

例3は、相手の意見を取り入れて意見文を書く指導のために有効に使うことができます。また、明確に自分の意見をもつとは、どういうことかについて考えさせることができます。

これらの活動例は、独立した一時間の授業でも楽しくできますが、できれば、単元展開計画の流れの中で、活動のねらいを吟味し、上手に使っていくことが望まれます。

3 作品から伝わることを書き手に伝え、相互評価を充実させましょう

ここでは、数時間以上の作文単元の相互評価の工夫について述べます。

〔作文単元の相互評価の問題点〕

現行の学習指導要領になって、「伝え合う力」というキーワードのもと、「書くこと」についても、学校生活や日常生活の中で書く目的や意図を明確にもつ作文指導がなされてきました。評価についても一般的には、作品（作文）の最後に相互評価や自己評価の欄を設けさせたり、授業の終末に自己評価カードを記入させたりして、評価活動が行われています。

しかし、教師も児童もマンネリ化してしまい、形式的に記号に を付けてしまうなど、惰性で進めるだけになってしまう傾向はないでしょうか。また、グループごとに作品を読み合い感想を発表させると、「習った漢字を使って書けていました。」「段落分けがきちんとできていました。」などの感想がよく聞かれます。評価票に記号を記入して終わり、という場合もあります。それぞれの作品に合った具体的な相互評価を成立させることが難しいようです。これでは、自己評価・相互評価が表面的には行われていても、実際にうまく機能しているとはいえません。

〔コミュニケーション活動としての相互評価〕

「そうか、もう一度手直しをしてみよう」と、書き手が意欲をもてる相互評価を行うためには、どのような工夫が必要なのでしょう。例えば、意見文を書き、相互評価をする場合、読み手が「どんなことが伝わったのか」を的確に読み、率直に言ったり書いたりするなど、書き手に返すことによって、書き手は自分の書いたものを客観的に見直すことができるのです。書き手と読み手が作文を仲立ちにしてコミュニケーション活動を成立させることが相互評価の最も大切なことだと考えます。



〔相互評価項目の工夫〕

このような相互評価を成立させるためには、お互いの作品をじっくり読ませる時間的な余裕が必要です。また、評価項目に右のような内容（1～6）をいくつか加えることによって、書き手は、書いたことが読み手にどのように伝わったのかを知り、納得し意欲的に推敲することができます。

言語活動例として、依頼や礼状などの手紙文を推敲させる場合にも、「この手紙文を受け取ると、相手はどのような気持ちになるか」などについて、受け取り手になったつもりで、相互に書き合うことで、よりよい文章に推敲させる視点を理解させることができます。

- 相互評価項目例（意見文の場合）
- 1 あなたが書くこととしたことは、次のようなことだと思えます。
- 2 次のところは、とくに力を入れて書かれていると思います。
- 3 私がよく書けていると思うところは、次のところがよくわかりませんが…。
- 4 次のことは、合わないように思います。
- 5 次の表記は、ちがうのではありませんか。
- 6 次の表記は、ちがうのではありませんか。
- 記述欄（以下略）

参考『大村はまの国語教室 - ことばを豊かに -』
(小学館創造選書 38)



平成16年度教育課程実施状況調査の結果を踏まえて作成した「栃木の子どもの学力向上を図る授業改善プラン」も、今回が3回シリーズの最終となります。第1回(H17.5、冊子)、第2回(H17.9、リーフレット)とともにご活用ください。